

真訓
兩誦

妙法蓮華經

並

開結

大意

法華經大意

一、悉達多太子

釈迦牟尼は、西暦紀元前九百年ごろ、中印度・憍薩羅国(Kosara)迦比羅衛城(Kapila-vastu)の淨飯王(首陀那Suddodana)の太子・悉達多(Siddhartha)として生まれ、幼いころから婆羅門の學者・跋陀羅尼(Bhadrani)あるいは朴奢蜜多羅(Visvāmitra)について、五明(声明、巧明、医方明、因明、内明)、四吠陀(梨俱吠陀=Rig-Veda, 娑摩吠陀=Sāma-Veda, 耶柔吠陀=Yajur-Veda, 阿闍婆吠陀=Atharva-Veda)などの婆羅門の學問を修め、さらに屬提提婆(忍天 Kṣānti-deva)について武藝を励み、文武兩道に達した。太子の天才は、思想的にますます輝きを加えたが、これにつれて太子は、世間的の快樂を嫌い、出家することによって、思想上の満足を得ようと望んで止まなかった。

ある時、太子が城門を出て四方を見て廻ったとき、腰の曲った白髮の老人がよろよろと歩き、また病人が息も絶えだえに、瘦せ衰えた身体を路に臥し、あるいは死人の屍を蓮台に置いて親族や眷

族が大声をあげて泣きながらこれを送るのを見て、世相の無常を感じ、人生における老・病・死の苦痛を免れる方法を悟りたいと考えている時に、一人の沙門が姿も心も清浄でいる有様を見て、決然として出家の志を起こし、深遠の道を探究しようと思った。

幸いにして、妃・耶輸陀羅 (Yasôdhara) との間には、一子、羅睺羅 (Rahula) が生まれたので出家の時が来たと思つて、十二月八日夜半、王妃、女官などが熟睡している間に御者の車匿 (Chanda) を連れて、白馬の健陟 (Kanthaka) に跨がり、王宮を出て東方の藍摩国 (Rama) の方へ行つた。藍摩国から東、阿伏弥 (Avami) 河畔の森林で自ら髪を剃り落し糞雑衣を着て、車匿に健陟を連れて王城へ帰らせた。

二、釈迦牟尼仏

それから恒河の流域を南行して、多くの婆羅門を歴訪し、ついに阿羅邏迦蘭 (Alara-Kalama) と鬱陀羅羅摩子 (Udraka-Rāmaputra) の二仙人について数論派の学理を学んだが、この派の学問が眞の解脱の道でないことを知り、自ら修学すべきであると考え、尼連禅河 (Nairanjana) の東岸に来て、さらに河を渡り、優婁頻螺村 (Urvilva) の森林に入り、もっぱら苦行して解脱の法を求めた。

ため、身体は疲れ果ててわずかに生命を保持するにすぎない有様であつた。ときに、父王から遣わされた阿若憍陳如(Kaundinya)などの五人も、一刻も釈尊の身边を離れず、共に苦行を修したのであつた。

この苦行は十二年の久しきに亘つたが、釈尊は、ついにこの苦行もまた真の解脱の法でないと知り、苦行を捨てて尼連禪河に入り、沐浴して、一人の牧女・難陀婆羅(Nandabala)の捧げる乳をのんで、身心が爽やかになることができた。憍陳如などの五人は、このことを見て、釈尊は退転したと考え、釈尊を捨てて西方の婆羅奈斯国(Varanasi)の鹿野苑(Mrigadava)に去つて行つた。

釈尊は、これを心につけて、独り東北に進み、前正覚山(鉢羅笈菩提山 Pragbodhi)の石窟に入つたが、端坐することができず、ふたたび河を渡つて西方に行き、伽耶城(Gaya)すなわち今の仏陀伽耶(Buddha Gaya)の菩提樹(Bodhidruma)すなわち畢波羅樹(Pippala)の下に金剛宝座に、吉祥(Svastika)の奉る淨轆草を敷いて安坐した。ここで沈思黙想、よく魔と戦ふこと四十九日、結局はこれを降して、生・老・病・死の根本を滅し、貪・瞋・癡が起ることもなく、真に解脱して生死を超越することができたのである。

十二月八日の早暁、朗然と覺つて、ついに仏陀(Buddha)となり、釈迦牟尼如来となつたのである。

る。年まさに三十歳、王城を出てから十二年を要したのである。

三、釈尊一代の說法

釈尊は、今や証得した覺をもつて広く社会に布教し、苦の衆生を濟度しようとして決心して、まず最初に正覺を成じたその座で三七日間、十方から集まった諸大菩薩に、仏陀の立場で、円融の理を説き、無尽無碍自在の緣起作用を明かして、正しく円教を説くと共に、別教をも説いたのが華嚴經で、旧訳六十卷、新訳八十卷を、七処八会で説かれたのである。

ついで釈尊は、婆羅奈斯国・鹿野苑に行つて、さきの橋陳如などの五人を濟度して比丘とした。その後十二年の間、十六大国で經を説いた。説いた処も説いた經もまちまちではあるが、主として阿含と名づけられる經を説かれたので、阿含時あるいは最初の説処に因んで鹿野時ともいうのである。すなわち、四阿含を説かれたのである。

そして、尼連禪河の附近を遊化して、三迦葉を教化し、摩迦陀国(Magadha)の王舎城(Rājagṛha)に入つて、頻婆娑羅王(Bimbisāra)を教化し、さらに舍利弗、目犍連を濟度して、迦比羅衛国に歸り、王族の阿難陀(Ananda)、提婆達多(Devadatta)、羅睺羅、阿那律(阿菟樓駄 Anuruddha)および

義母・摩訶波闍波提 (Mahaprajapati) 妃・耶輸陀羅を初め賤族・優波離 (Upali) にいたるまで化度をしたのである。

釈尊は、頻婆娑羅王の寄進した王舎城の竹林精舎 (Venuvana-vihara) と、それに舍衛国 (Sāvasti) の須達長者 (Sudatta) と祇陀太子 (Jetavana) の寄進した祇園精舎 (Jetavana-vihara) および恒河 (北方・毘舍離城の大林精舎 Mahavana-vihara) に在って弟子を教育したのである。

阿含經を説いた後、八年程の間は、大小乗教を同時に説いて、求道者に恥小慕大の念を起こさせた。これを方等時といい、維摩經、楞嚴三昧經、金光明經、勝鬘經などの諸經を説かれたのである。

つぎの二十年の間には、小乗の三藏を除いた大乘教を説き、小乗の人々に大乘の法門を通達させたのである。これを般若時といい、摩訶般若、光讚般若、金剛般若、大品般若など、いろいろの般若經を説かれた。

なお、耆闍崛山 (靈鷲山 Gijakuta. Grdhrakuta) は、王舎城 (Rājagṛha) の艮にあつて、この山で実に大無量壽經、大般若經ならびに妙法蓮華經など、多数の大乘經典が説かれたのである。

最後の八年にいたって、敗種の二乗を会して本有に称い、仏・所証の実理に入れ、十界皆成の旨

を説き、あわせて仏寿長遠の願本を説いたのを法華經といい、仏入滅の二月十五日の一日一夜に一切衆生・悉有仏性を説いたのが涅槃經である。法華を前番の開会とすれば、涅槃は後番の開会となるけれども、自から大収・拮拾の別があるのである。

涅槃經は、金工・純陀(Cunda)を対告衆として説き、さらに拘尸那揭羅城(Kusinagara)外の沙羅雙樹(Salavana)の間に頭を北にして臥し、百二十歳の老婆羅門・須跋陀羅(Subhadra)のために八正道を復説して最後の弟子とした。その夜半、沙羅雙樹の下で侍者・阿難および阿菴樓陀などに護られて入滅した。

時に宝寿八十歳、二月十五日のことであつた。

四、經典の結集

釈尊入滅後、その教法が散逸して後世に伝えられないのを恐れた弟子たちは、当時はまだ文字がなかったので、集まって互いに教法を暗誦しようとして、五百の弟子を撰び、大迦葉(Maha Kāśyapa)を上首として、王舎城の南、頻波羅山(Vaibhava)の北麓にある七葉窟(Sapta Parva-gūha)で、摩訶陀国王(Magadha)阿闍世(Ajatasatru)の外護によって、阿難陀は經を誦し、優波離は律を誦

し、七箇月を経て、ようやく經と律の結集ができた。

これを、第一回結集、もしくは王舎城の結集という。

その後年月が経過するにしたがい、自由思想が盛んになってきて、釈尊の教法について異議が生じ、保守的思想の上座部と進歩的思想の大衆部との間で争ができてきた。そこで釈尊滅後百年ごろに、この両方を統一しようとして、七百の僧を毘舍離の大林精舎に集め、両派四人の委員で律を検討したが、ついに進歩派の大衆部を非法として排したので、ここに初めて仏教が分立を生じたのである。

これを、第二回結集、あるいは毘舍離の結集という。

釈尊滅後二百五十年ごろになると、仏教はますます盛んになったが、教法の異論が甚だしいので時の大王・阿輸迦王(阿育 Asoka)は、首府・華子城(Pataliputra)の阿輸迦寺(Asokarama)に一千の僧を集め、目犍連子帝須(Māṇḍalyāyani-Putra Tisya)を上首として結集を行ったが、大衆部はこれに与らず、上座部のみで結集した。このころから文字が使われるようになった。

これを、第三回結集、または華子城の結集というのである。

さらに滅後七百年ごろ、仏教の外護者・迦膩色迦王(Kaṇiṣka)が出て、迦溼弥羅(Kāśmīra)に、世

友（筏蘇密多羅 Vasumitra）脇比丘（Pāśva）馬鳴（Aśvaghosa）などの五百の小乗學者、五百の大乗學者、五百の居士を集め、十二年を費して、經、律、論の三藏を結集した。この時から大乗經典が藏經中に加えられたのである。

これを、第四回結集とも迦溼弥羅の結集ともいっているのである。

五、漢訳法華經

この法華經は、梵名を薩達磨分陀利伽蘇多攪といい、漢訳して、妙法蓮華經という。

この經は印度で、すでに梵本に異本があつたようであつて、梵本を支那に將來した學者は、それぞれの原本によつて翻譯したので、いろいろ異なつた漢訳本ができたことと思われる。

ここに、訳本を列举すれば、

1 法華三昧經 六卷 魏正無畏訳（西曆二五六年）

2 薩曇分陀利經 六卷 西晉竺法護訳（西曆二六五年）

3 正法華經 十卷 西晉竺法護訳（西曆二八六年）

4 方等法華經 五卷 東晉支道根訳（西曆三三五年）

5 妙法蓮華經 八卷 姚秦鳩摩羅什訳 (西暦四〇六年)

6 添品法華經 七卷 隋闍那崛多共笈多訳 (西暦六〇一年) の六訳であるが、今は、正法華經、

妙法蓮華經、添品法華經の三本のみが現存していて、これ六訳三存というのである。

そのほかに西蔵語訳、蒙古語訳、満洲語訳、仏文訳(ビュルヌフ Burnout)、英文訳(ケールン Kern) 和文訳(南条)などの訳本がある。

六、現存法華經

日蓮大聖人時代には、すでに現今のように三訳のみしかなかったことと思われる。それは、妙法蓮華經は所依の經典として使用され、また御書には正法華經と添品法華經を引用されているが、そのほかには引用されていないのを見て知る事ができる。

今、この三本の品の異同を列挙して見ると、

正法華經

妙法蓮華經

添品法華經

光瑞品第一卷一

序品第一卷一

序品第一卷一

善権品第二

方便品第二

方便品第二

おろじ ほんだい まき
応時品第三卷二

ひゆ ほんだい まき
譬喩品第三卷二

ひゆ ほんだい まき
譬喩品第三卷二

しんらく ほんだい まき
信樂品第四卷三

しんげ ほんだい
信解品第四

しんげ ほんだい
信解品第四

やくそう ほんだい
藥草品第五

やくそう ほんだい まき
藥草喩品第五卷三

やくそう ほんだい まき
藥草喩品第五卷三

じゆしやうもん けつ ほんだい
授声聞決品第六

じゆき ほんだい
授記品第六

じゆき ほんだい
授記品第六

おうこ ほんだい まき
往古品第七卷四

けじやうゆ ほんだい
化城喩品第七

けじやうゆ ほんだい
化城喩品第七

じゆ でし けつ ほんだい まき
授五百弟子決品第八卷五

でし じゆき ほんだい まき
五百弟子授記品第八卷四

でし じゆき ほんだい まき
五百弟子授記品第八卷四

じゆあ なんら うんけつ ほんだい
授阿難羅云決品第九

じゆがくむ がくにんき ほんだい
授學無學人記品第九

じゆがくむ がくにんき ほんだい
授學無學人記品第九

やくおうによらい ほんだい まき
藥王如來品第十卷六

ほつし ほんだい
法師品第十

ほつし ほんだい
法師品第十

ほうとう ほんだい
七宝塔品第十一

けんほうとう ほんだい まき
見宝塔品第十一卷五

けんほうとう ほんだい
見宝塔品第十一

だいば だつた ほんだい
提婆達多品第十二

かんぜつ ほんだい
勸説品第十二

かんじ ほんだい
勸持品第十三

かんじ ほんだい
勸持品第十二

あんぎやう ほんだい まき
安行品第十三卷七

あんらくぎやう ほんだい
安樂行品第十四

あんらくぎやう ほんだい まき
安樂行品第十三卷五

ぼ さつじゆう じゆじゆつ ほんだい
菩薩從地涌出品第十四

じゆうじゆ じゆつ ほんだい
從地涌出品第十五

じゆうじゆ じゆつ ほんだい
從地涌出品第十四

にょらい げんじゆ ほんだい
如來現壽品第十五

にょらい じゆりやう ほんだい まき
如來壽量品第十六卷六

にょらい じゆりやう ほんだい
如來壽量品第十五

御福事品第十六卷八

分別功德品第十七

分別功德品第十六

勸助品第十七

隨喜功德品第十八

隨喜功德品第十七卷六

歎法師品第十八

法師功德品第十九

法師功德品第十八

常被輕慢品第十九卷九

常不輕菩薩品第二十卷七

常不輕菩薩品第十九

如來神足行品第二十

如來神力品第二十一

如來神力品第二十

藥王菩薩品第二十一

藥王菩薩本事品第二十二

藥王菩薩本事品第二十二

妙吼菩薩品第二十二

妙音菩薩品第二十三

妙音菩薩品第二十三卷七

光世音普門品第二十三卷十

妙音菩薩品第二十四

妙音菩薩品第二十三卷七

總持品第二十四

觀世音菩薩普門品第廿五卷八

觀世音菩薩普門品第二十四

淨復淨王品第二十五

陀羅尼品第二十六

妙莊嚴王本事品第二十五

樂普賢品第二十六

妙莊嚴王本事品第二十七

普賢菩薩勸發品第二十六

囑累品第二十七

普賢菩薩勸發品第二十八

囑累品第二十七

以上三本のうち、羅什訳がもつともよく後世に読誦せられており、我が日蓮正宗も羅什訳妙法

蓮華經をもつて所依の經典とするのである。

七、訳者・羅什三蔵

鳩摩羅什とは梵名で、また鳩摩羅什婆、鳩摩羅耆婆ともいい、童寿と訳すのである。

父は鳩摩炎といつて印度の国相であつたとつたえられており、出家して龜茲国に行つて国師となつた。そこで国王の妹の耆婆を娶つて、羅什を生んだので、父母の名を取つて鳩摩羅耆婆と名づけた。

羅什は、生まれながらに容姿端麗・聰明英俊であつた。七歳で出家し、九歳で母に連れられて罽賓国に行き、王の従弟・槃頭達多を師として阿含を学び、十二歳の時、母と共に龜茲国に歸つた。ついで月支国に行き、須利耶蘇摩について大乘諸經を學んだ。ふたたび、歸国してからは大乘經を弘め、母の意によつて大乘經を東方に伝えたいと念願した。母は印度に行つたが、自分は龜茲に留まつて、大いに大乘經論を興した。前師・槃頭達多は龜茲国に来て、羅什からかえつて大乘經を授けられて、大乘の弟子となつた。

前秦の建元十八年九月（西曆三八二年）、秦王・苻堅は將の呂光を遣わして龜茲および烏耆の諸国を討たせたが、龜茲国は大敗して、羅什は獲えられて人質となり、龜茲国王の女を娶わされて、涼州

に來た。その時、符堅が姚萇(蒙古族)に殺されたので、呂光は、涼州の王と稱した。そこで羅什も涼州に停まることになった。

後秦の弘始三年五月(西曆四〇一年)、姚興は、呂隆を討つて降伏させ、十二月二十日、羅什を長安に迎えて國師とし逍遙園におらせることになった。

ここで阿彌陀經、大品般若經、大智度論、維摩經、梵網經、金剛般若經、中論、百論、十二門論など、いろいろの大乗經を翻譯したものが三百八十四卷に及ぶということである。そのなかでも殊に、法華經の訳出については最も心血を注ぎ、弘始八年五月(西曆四〇六年)國王・姚興の列席を得て、五百の訳經僧を指揮して翻譯したのであった。

姚興は、羅什に子が無いので、その法種を遺させようとして、無理に妓女十人を侍らせたので、羅什は決して僧坊に住まなかった。

羅什は、弘始十五年四月十三日(西曆四一三年)年七十歳をもって、長安大寺で寂したので、逍遙園で荼毘に附した。

あるとき羅什は、人々に次のように語ったという。

「自分は闇愚であつて、しかも不淨の身をもつて訳經した。自分が死んだら必ず火葬にせよ。もし

仏法の所伝に謬りがないならば、身は焼けても必ず舌は焼けないであろう。もし舌が焼けたならば、我が訳経も捨てよ」といったが、死んで後、火葬にしたところ、舌のみが焼けずに火中の青蓮華の上に遺つて、夜中に五色の光を放ったということである。

八、我が国の法華經傳承

欽明天皇十三年十月（西暦五五二年）百濟の聖明王が、仏像と經論を我が国に伝えた時に、すでに法華經は伝えられた。

推古天皇十四年十月（西暦六〇七年）聖德太子は、岡本宮で法華經を講じ、また二十二年四月十三日（西暦六一五年）法華經義疏四卷を作られた。太子の義疏は、光宅寺法雲（西暦三七七―五二九年）の法華經義記によって作られたものである。

また、聖武天皇は、天平十二年六月（西暦七四〇年）諸国に命じて、国ごとに法華經の書写をさせ、翌十三年三月、国ごとに国分寺および国分尼寺を置かせた。尼寺は法華滅罪の寺と称して、妙法蓮華經十卷を置き、法華經の功德によって女人の五障を滅して、現当の安樂を得させようとしたものである。

平安朝へいあんちようになって村上天皇むらかみてんのうは、天曆九年正月てんりやくねんしやうがつ（西曆九五五年）御母おんははのために法華經ほけきやうを親寫しんしやし宮中弘徽殿きゆうちゆうこぎでんで法華八講ほつけはつこうを行おこなわせた。四月よつぎの間に月に二座にざの講席こうせきを設けて八講はつこうといった。

なお法華經八卷ほけきやうかんに開結二經かいけつにきやうを加えて、十座じざに分けて講こうずるのを法華十講ほつけじつこうといい、法華經ほけきやうならびに開結の三部おふを三十日間にちかんにわたって、一日いちにちに一品ほんづつ講こうずるのを法華三十講ほつけさんじつこうという。その後、法華八講はつこう、十講じつこう、三十講さんじつこうは、平安朝時代の貴族きぞくの儀式ぎしきとして、毎年恒例まいねんこうれいの行事ぎやうじとなった。

後白河上皇ごしらかわじやうこうは、嘉応元年六月かうがねんがつ（西曆一、一六九年）御落飾ごらくしやくこ後、持仏堂じぶつどうで、源平恩怨無差別げんぺいおんえんむしやべつの万靈まんりやうを供養くやうするため、長期ちやうきにわたって、不斷ふだんに法華經ほけきやうを講演こうえんせられたので、この堂どうを長講堂ちやうこうどうといって、後々のちのちまで永ながく法華經講讀きやうこうさんの堂どうとなった。

日蓮大聖人にちれんだいしやうにんの願けん仏未來記ぶつみらいき（御書五〇九ページ）に、

「天台大師てんだいだいしは釈迦しやかに信順しんじゆんし法華宗ほつけしゆうを助たすけて震旦しんたんに敷揚ふやうし・叡山えいざんの一家いつけは天台てんていに相承そうじやうし法華宗ほつけしゆうを助たすけて日本にほんに弘通くわつうす」

とおおせあるように、日本にほんでは伝教大師でんきやうだいいしが、平安朝へいあんちようの初めごろ、法華經ほけきやうを闡揚せんやうして、日本天台宗にほんてんだいしゆうの祖そとなったのである。

鎌倉時代かまくらじだいに入はいって、法華經ほけきやうの予証よしやうにより、日蓮大聖人にちれんだいしやうにんが出現しゆつげんして、天台大師てんだいだいしが法華經迹門ほけきやうしやくもんを願揚けんやう

したのに対して、本門を高唱し、その寿量品の文底の南無妙法蓮華經を開顯せられたのである。
 開目抄(御書二〇二ページ)には、日蓮大聖人は、釈尊滅後における正しい法華經の行者を挙げて、
 「像法の中には天台一人法華經・一切經をよめり……像の末に伝教一人・法華經・一切經を伝説の
 ごとく読み給へり……今末法の始め二百余年なり(中略)但日蓮一人これをよめり」
 と、顯仏未來記と共に三国四師の意を表しているが、これは外用の相承であつて、日蓮大聖人の内
 証は、正しく釈尊、日蓮、同体用異の本懷であり、久遠の本法妙法蓮華經を末法の人々に下種せら
 れた辺から拝するならば、日蓮大聖人こそ久遠元初の御本仏であらせられるのである。

九、説時ならびに説処

釈尊は、年三十歳の十二月八日、仏陀伽耶の菩提樹の下で成道してから四十二年、七十二歳から
 八十歳にいたる八年の間、法華經を説かれたのであるが、このことは、無量義經の四十余年末顯真
 実の文および法華經方便品の要當説眞実の文をもつて知ることができる。そして、その説処は序品
 に、「一時、仏、王舎城、耆闍崛山中に住して」とあるから、法華經は、中印度摩訶陀国の首都王
 舎城の東北に聳える海拔約百米の耆闍崛山で説かれたのである。耆闍崛山はまた靈鷲山ともいう。

そして、耆闍崛山で、序品の初めから宝塔品第十一の半の「諸の大衆を接して皆虚空に在きたもう」まで説かれ、ついで宝塔品第十一の後半「大音声を以って普く四衆に告げたまわく」から、囑累品第二十二の終わりまでを、虚空の多宝塔中に多宝仏と並座して説かれ、所化の大衆もまた、仏の神力によって虚空中で聞法したのであった。さらに釈尊は多宝塔中から出て耆闍崛山に行つて薬王品第二十三から終わりまでを説かれた。それで、これを法華經の二処三会というのである。

十、法華經の註釈

法華經を註釈した人は、古くから数多くあった。天台大師の前には、光宅寺法雲の法華經義記を初めとして、すでに七十余家ありといわれている。天台大師の後にも、嘉祥の義疏や慈恩の玄賛などがある。しかし、法華經の真義をもっとも正しく説き明かした人は、中国の陳隋の世に出て南三北七を破した天台智者大師であつた。

いわゆる天台大師の三大部とは、法華玄義、法華文句、摩訶止觀の各々十卷、合して三十卷をいう。法華玄義は、法華經の幽玄なる義旨を概説し、法華經が一代仏教において最尊無上なることをあらわしたものである。法華文句は、法華經二十八品の文々句々について科段を分割し、字句を解釈

し、旧解きゆうかいを批正ひせいして、法華ほつけ独尊どくそんの旨義しぎを明あかしている。摩訶止觀まかしかんは、理りの一念三千ねんさんの法門ほうもんを説とき、己心修証こしんしゆしやうの方法ほうほうとして十境十乘じやうじやうじやうもんの行門ぎやうもんを明あかして法華ほつけ円頓えんどんの行法ぎやうほうとなしている。天台てんだいの後身こうしんといわれる日本にほんの伝教大師でんぎやうだいしは、慈恩等じおんどうの義ぎを破はし「法華ほつけ經を讀さんすと雖いえども還かえつて法華ほつけの心こころを死ころす」といっている。天台大師てんだいだいしの三大部だいがふについて妙樂大師みやうらくだいしの末註まつちゆうがある。すなわち、法華ほつけ玄義げんぎ釈籤しやくせん、法華ほつけ文句もんぐ記き、摩訶止觀まかしかん輔行ふぎやう伝でん弘決くわつの三大部だいがふである。

法華ほつけ經の予言よげんのごとく寸分すんぶん違ちがはず末法まつぽうに御出現ごしゆつげんの御本仏ごほんぶつ・日蓮大聖人にちれんだいしようにんは、開目抄かいもくしょう上じやう(御書二〇二ページ)に、「日蓮にちれんが法華ほつけ經の智解ちげは天台・伝教でんぎやうには千万せんまんが一分おんも及およぶ事ことなけれども難なんを忍しのび慈悲じひのすぐれたる事ことは・をそれをも・いだきぬべし」とおおせになり、法華ほつけ經の註釈ちゆうしやくは天台・伝教でんぎやうに窮きうまるとし、しかして文底もんてい仏法ぶつぽうの立場たちばから法華ほつけ經に註釈ちゆうしやくを加くわえられている。すなわち御義口伝おんぎくでんと御講聞おこうきき書がきであり、末法まつぽう現在げんざいにおける法華ほつけ經の讀よみ方は、本書ほんしゆ以外いがいにないことを知るべきである。

御義口伝おんぎくでんは、日蓮大聖人にちれんだいしようにんの法華ほつけ經註釈ちゆうしやくの御義おんぎを、第二祖だいにそ・日興上人にっこうしようにんが筆記ひつぎされた甚深じんじんの義ぎである。御講聞書おこうききがきは、日向記にこうきともいわれるごとく、同じく日蓮大聖人にちれんだいしようにんの御義おんぎを日向上人にこうしようにんが筆記ひつぎしたものである。日蓮大聖人にちれんだいしようにんには、そのほか法華ほつけ經に從來じゆらいの註釈ちゆうしやくの要文ようもんを書かきつらねた註法華經ちゆうほつけきやうが現存げんそんしている。

十一、五重三段

仏教の教典を研究するには、序分、正宗分、流通分の三段を具えていることを知らなければならぬ。序分とは一經の序論で、正宗分とは一經の本論であり、流通分とは、すでに説かれた經の趣旨を後代に伝える意をもって説かれたものである。この三段をもつて一經を分判するのであるが、またこれを広義に涉して一代聖教を三段に分っているのである。

日蓮大聖人は、觀心本尊抄で一代の諸經を法華經によつて、序、正、流通に分けて、五重三段とせられた。

第一重 一代聖教三段（一代一經三段）

序分—華嚴、阿含、方等、般若等の法華以前の諸經。

正宗分—法華三部（無量義經、法華經、觀普賢經）

流通分—涅槃經。

第二重 法華十卷三段（法華一經三段）

序分—無量義經と序品。

正宗分—方便品から分別功德品十九行の偈（以て無上の心を助く）までの十五品半。

流通分—分別功德品・現在四信からの十一品半と觀普賢經の一卷。

第三重 迹門熟益三段

序 分—無量義經と序品。

正宗分—方便品から授學無學人記品までの八品。

流通分—法師品から安樂行品までの五品。

第四重 本門脱益三段

序 分—涌出品の半分（汝等自ら當に是れに因て聞くことを得べし）まで。

正宗分—涌出品の後半分（爾の時釈迦牟尼仏告げ）から壽量品と分別功德品（一切善根を具し

て以て無上の心を助く）までの一品二半。

流通分—分別功德品の後半分から觀普賢經まで。

以上を通過四重三段といい、一代仏教の中心は法華經、法華經の中心は方便品から分別功德品の

上半分までの十五品半にあり、また迹門十四品と本門十四品の二經に分けられていて、本門十四品の

中心は、壽量品を中心としたその前後の半分づつ、いわゆる一品二半であって、迹門の正宗分

の及ぶ所ではないから、法華經の中心は一品二半と示されたものである。これは、釈尊の所説の在世の法華經であって、さらに末法については日蓮大聖人は、寿量文底の意に約して三段に分けられたのである。すなわち、

第五重 文底下種三段

序 分―過去大通智勝仏の法華經から、今日の釈迦仏の一代五十余年の諸經ならびに十方三世諸仏の微塵の經々。

正宗分―寿量品文底の南無妙法蓮華經。

流通分―体内の、過去大通智勝仏の法華經から今日の釈迦仏の一代五十余年の諸經ならびに十方三世諸仏の微塵の經々。その流通の正体は南無妙法蓮華經。

今、第五重の正宗分から見れば、第四重の本門脱益三段の正宗分寿量品は、文上となるのである。

十二、法華經の総科

法華經の本文を解し易くするために天台大師の総別の科文によって図解すれば、次のようである。

序分

序品 第一

正宗分

略開三顯一

方便品 第二

迹門

廣開三顯一

因緣周

授記 述成 領解 正說

授學無學人記品 第九
五百弟子授記品 第八

譬說周

授記 述成 領解 正說

信解品 第四
藥草喻品 第五
授記品 第六
化城喻品 第七

法說周

授記 述成 領解 正說

譬喻品 第三

流通分

功深福重 命勸流通

法師品 第十

引往兼益以証流通

見宝塔品 第十一
提婆達多品 第十二

他方此土勸信流通

勸持品 第十三

本門

序分

正宗分

流通分

初心方法不慮危苦

安樂行品第十四

略開近顯遠

從地涌出品第十五

廣開近顯遠

正開近顯遠

如來壽量品第十六

總授法身記

總申領解

分別功德品第十七

初品因功德

隨喜功德品第十八

初品果功德

法師功德品第十九

信毀罪福

常不輕菩薩品第二十

功德流通

囑累流通

如來神力品第二十一

苦行乘乘

藥王菩薩本事品第二十三

付囑流通

化他流通

三昧乘乘

觀世音菩薩普門品第二十五

總持乘乘

陀羅尼品第二十六

誓願乘乘

妙莊嚴王本事品第二十七

自行流通

神通乘乘

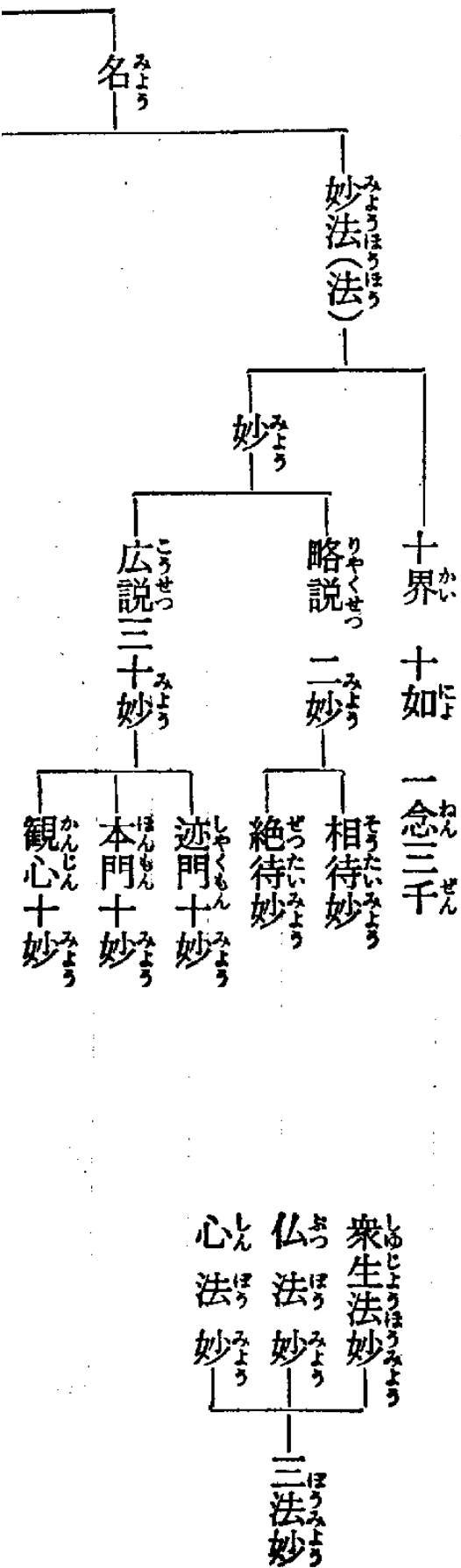
普賢菩薩勸發品第二十八

十三、総題釈

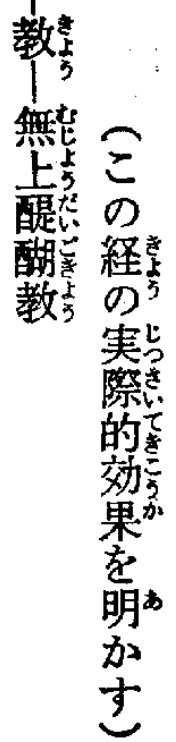
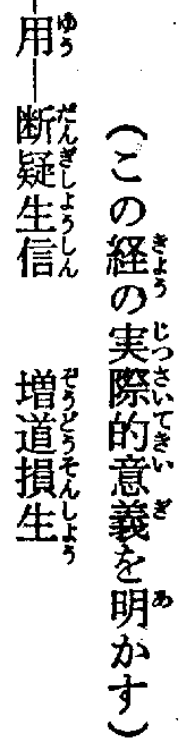
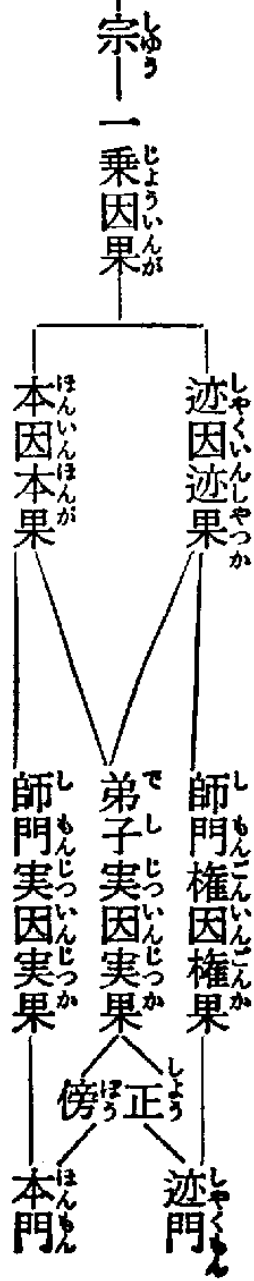
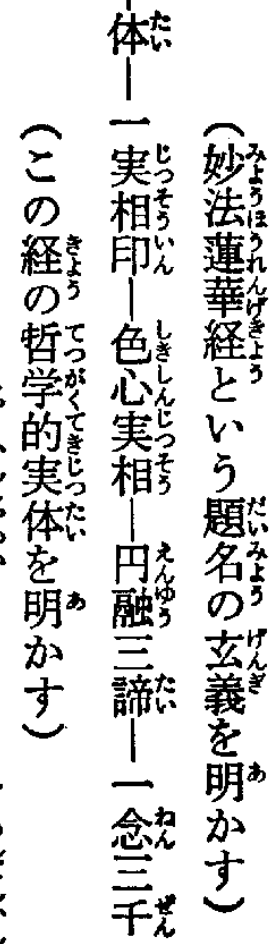
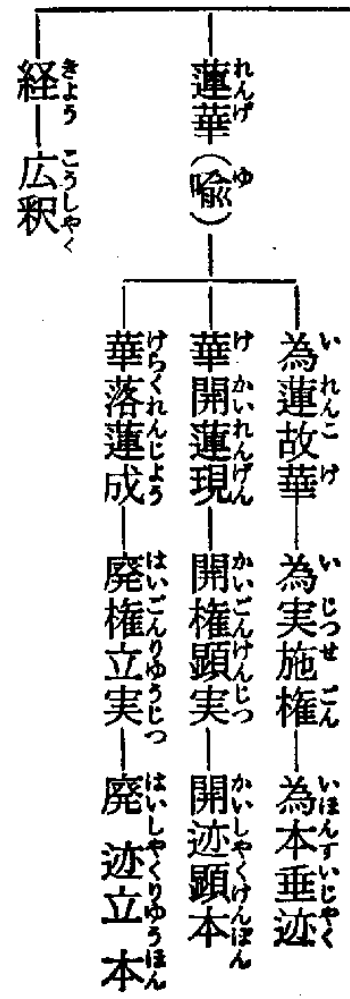
天台大師は、総題妙法蓮華經を、名、体、宗、用、教の五重玄義に約して解釈している。
日蓮大聖人は、このことを唱法華題目抄（御書一三ページ）に、

「天台大師・玄義十巻を造り給う、第一の巻には略して妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の巻より七の巻に至るまでは又広く妙の一字を宣べ、八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華の三字を釈し、第十の巻には經の一字を宣べ給へり」

と釈せられている。今、それを図解すると、次のようである。



義玄重五



（この經の一代諸經中における地位を明かす）

にちれんだいしようにん
日蓮大聖人は、また御義口伝（御書七〇八ページ）に、

「妙みょうとは法性ほつしょうなり法ほうとは無明むみょうなり無明法性むみょうほつしょう一体たいなるを妙法みょうほうと云いうなり蓮華れんげとは因果いんがの二法ほうなり是又これまた因果いんが一体たいなり經きょうとは一切衆生の言語音声さいしゆじょうごんごおんじょうを經きょうと云いうなり、（中略）法界ほっかいは妙法みょうほうなり法界ほっかいは蓮華れんげなり法界ほっかいは經きょうなり」

と説とかれて、宇宙うちゅう、法界ほっかいは悉ことごとく妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの当体とうたいであることを示しめされているのである。

品品大意

一、序品大意

序品は、通じては法華經の總序であり、別しては迹門十四品の序分であるから、通序、別序と分けることができる。

通序は諸經に通じているところの序分のことで、必ず「如是我聞」の句が最初にあり、それから、「一時」、「仏」が「何処」で、「誰」と俱にいたというふうに書かれるのであつて、これを通序という。

この序品の通序は、信、聞、時、主、処、衆の六成就からなり、別序はこの經にかぎる序分であつて、集衆、現瑞、疑念、發問、答問の五序からなりたっている。

まず、現瑞序では、此土の六瑞（説法、入定、雨華、地動、衆喜、放光）を現じ、その放光瑞で、東方万八千土を照らすことによつて、他土の六瑞を現じて、仏の化導の甚深であることを示してい

る。

そこで現瑞を縁として、弥勒菩薩が大衆の代表としての問を發し、それに文殊師利菩薩が惟忖（思考）して答えるのである。

その答中に、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫という久遠における日月燈明仏の説法化導を示して、今の釈迦仏の現瑞の相が、燈明仏の現瑞と同じであることを説くのである。

この序品で、すでに本門の久遠実成の由来を、秘かに説示しているのである。

二、方便品大意

方便品は、十方仏土のなかには唯一仏乗の教法のみであることを説いたのである。

まず、方便という語を、天台大師は三義に解釈せられている。

第一を法用方便という。衆生教化の方法が巧みで、よく衆生の機に叶って、用をなし利益をなす

ことをいうので、すなわち声聞乗の人には四諦の法を説き、縁覚乗の人には十二因縁の法を説き、

菩薩乗の人には六度の法を説いたようなのは、教化の方法が人々の機に相應して各々功用利益をし

たからで、これを方便説といい、一般に通ずる義である。

第二を能通方便といい、方便とは真実に対する語で、真実にはいるの門との意である。法師品の「方便の門を開いて真実の相を示す」の文から取ったのである。これはなんのために方便の法を説くのかというと、別に真実の理があつて、それへはいらせる門戸になるという方便の性質を示したものである。これも一般に通ずる義である。

第三を秘妙方便といい、爾前經において三乘即一乘法なることを秘して明かさなかつたのを秘方といい、その秘方を今打ち明けて三乘即一乘法なりと顯わしたのが妙であり、妙を便と名づけるのである。秘方とは三乘法をいい、三乘法がすなわち一乘法であることを妙便というのである。これによつて、この經が方便品と名づけられ、またこれが法華經に限る方便の義釈でもある。

そして、法用、能通の義による一乘法とは別の三乘法を方便という。すなわち法華以前の方便は体外の方便といい、一乘法と同体の三乘法を体内の方便であるという。法華經の方便は、体内の方便便というのである。

これまで三乘法即一乘法であることを秘しておつたのを打ち明けて、三乘即一乘なりと顯わすのを、開三顯一とも開權顯實とも開顯とも開會ともいうのである。

この經の所詮を要約すると、教行人理の四一開會であつて、

教に約すれば、三乗即一乗であり、
行に約すれば、汝等所行是菩薩道であり、
人に約すれば、二乗作仏であり、
理に約すれば、諸法実相四仏知見であり、

この四一について、願一を説くのである。

そして、開三願一については、まず略開三願一と広開三願一とに二段され、略開三願一は十如是の文であつて、いわゆる一念三千の法門は、これから出ているのである。

釈尊は、五千の衆が礼仏而退の後、純有貞実の衆のみであるのを見て、「増上慢の人、退くも亦佳し」として広開三願一を説かれ、三周の説法がある。すなわち、この品は法説周の正説段である。

その化導の方法は、五仏（十方諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏）同道であることを示し、必ず三乗をもつて衆機を調熟し、最後に一乗の究竟法を説いて仏の出世の功德の終わりを示しているのである。

三、譬喩品大意

迹門の正宗分のうち、広開三顯一は、三周の説法で始終するのである。その法説周においての正説は、方便品で尽きるので、この時、上根の舍利弗一人が、諸法実相の妙理を悟って、そして、三乗即一乗の法を領解し、その舍利弗の領解に対して、釈尊が承認して、さらに相異のないことをのべ、そして舍利弗の劫・国・名号を説いて未来成仏の保証を与え、そこで一座の四衆八部が歡喜して、法説周の一段の法門は終わるのである。

そこで舍利弗は、他の声聞が未領解であるから、釈尊に向かつて詳説を請い、爾時舍利弗白仏言世尊から始まって、釈尊は、三車火宅の譬喩を説かれるので、これが、この品の譬説周の正説段をなすのである。

この三車火宅の喩によつて、三車三乗の権を開し、大白牛車を賜わつて一車一乗の実を顕わすのである。

なお、この品には、「若し人信ぜずして、此の経を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と誡められ、憍慢、懈怠、計我、淺識、著欲、不解、不信、聲聲、疑惑、誹謗、輕善、憎

品品大意

善、嫉善、恨善の十四謗法が説かれている。

四、信解品大意

この品は、譬説周のなかの領解段であつて、釈尊が前品で、三車火宅の譬をもつて、開三頭一の旨を説かれたので、須菩提、迦旃延、迦葉、目連の四大声聞が、始めてその旨を領解し、長者窮子の譬を説いて領解の旨をのべたのである。

長者窮子の譬では、巧みに種熟脱の三時を五時にわたつて説叙して、領解のままをのべて説いている。

一には、父子相失は、大通智勝仏の時の下種から中間、退大取小を譬え、

二には、父子相見は、熟益、今番出世の仏による華嚴の擬宜に譬え、

三には、父命追誘は、阿含、方等の誘引、彈呵を譬え、

四には、領知家業は、般若淘汰を譬え、

五には、正付家業は、正しく法華の開會、脱益を譬えたものであつて、

そして最後に、仏恩の廣大甚深を讃歎して終わるのである。

五、藥草喩品大意

前の信解品において、四大声聞が三車一乗の喩を聞いて、三乘方便一乘眞実の旨を知り、これを長者窮子の喩をもつて領解したのであるが、さらに一步を進め、教は本来一相一味であるけれども、衆生の機根に随つて、三乘五乗の別をなしていることを、十分に解していないので、釈尊は、「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」と三草二木の喩（雲雨藥草の喩）を説いて、実相一味の法が、機によつて三乘五乗と分れることを示された。

すなわち、釈尊が、四大声聞の領解を述成したところであるから、所潤の藥草を取つて藥草喩品と名づけられるのである。

五乘七方便は、ともに差別の利益をこうむるものであるが、一地の所生、一雨の所潤であることを説いているのであるから、結局は、差別の五乘七方便は、ただちに仏智の一仏性に開会せられて、無差別の仏海に歸入することを知らせるので、すべて仏の善巧方便であることを教えられているのである。

六、授記品大意

授は与える義、受は得くるの義、記は事を記すということであつて、すなわち成仏の事を記すので、仏意によれば授記、機情によれば受記で、いずれを書いてもさしつかえない。

また、行因、得果、劫国、仏寿、正像、国淨の六事を分別するので、記薊ともいう。

この品では、四大声聞の当来成仏の事を六事に分別するので、記薊であり、また仏意にまかせて授記品というのである。

そして授記については、爾前経にも菩薩、善人、男、人天の授記はあるが、二乗、悪人、女人、畜生の授記は法華経独特であるから、法華経にかぎり二乗作成というのである。

この品で中根のための譬説周は終わり、最後の二頌半の偈頌に下根の声聞のために、「宿世の因縁、吾れ今当に説くべし汝等善く聴け」と宿世の因縁を説いて開悟せしめようと、つぎの化城喻品の弄引をなしている。

七、化城喻品大意

この品は、法華三周のなかの、第三因縁周の正説を説いたものである。法説譬説の二周では、まだ領解しない下根の声聞のために、久遠已来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。

まず、前段に、三千塵点劫の久遠における大通智勝仏の出世成道を説き、十六王子の請によつて半満権実の法輪を転じ、ついに法華経を説いて出世の本懐を遂げて入定し、つぎに十六王子の法華を覆講して大衆に結縁するのである。

つぎに後段では、この因縁を譬喩として説くために、化城の譬喩を説かれて、二乗の涅槃は、化城のようなもので真実ではなく、「宝処は近きに在り、此の城は実に非ず、我が化作ならくのみ」であると説き、「仏道は長遠なり、久しく勤苦を受けて、乃し成ずることを得べし」と説かれるのである。

八、五百弟子授記品大意

この品とつぎの授学無学人記品の二つは、因縁周の授記段である。

因縁周でも領解、述成の二段はあるが、前の譬説周の領解段（信解品）、述成段（葉草喩品）

のように長くないので、これを授記中に摂したのである。

この品は、まず最初に、下根の声聞を代表して富楼那の默然領解があり、釈尊は富楼那の過去の修因行満を明かし、法明如来の記莂を授け、

ついで、千二百人に次第に授記したが、別して阿若憍陳如、優楼頻伽迦葉をはじめ莎伽陀（須利槃特）などの五百人に、普明如来の同一名号で同時に授記したのである。

つぎに釈尊は、迦葉を通じて、この会にいない一切の声聞にも、授記を説かれた。授記を得た五百の声聞は、歡喜踊躍して繫珠の譬をのべて、仏恩の深重を得解したのである。

九、授学無学人記品大意

この品もまた、下根の阿難、羅睺羅をはじめとして学無学の二千の授記を明かすのである。

学とは、まだ惑を断尽せず、当に真理を修学している者、すなわち四果の聖者のなかの前三果（預流、一來、不還の三果）の人を指す。無学とは、惑を断尽して、この上に学ぶ必要のない者、すなわち阿羅漢果の人のことである。

まず、阿難に山海慧自在通王仏、羅睺羅に蹈七宝華仏の記莂を与え、さらに学無学二千人は同類

同性の人々であるから、同一名号の宝相如来の記筋を授けられたのである。

そこで、学無学二千人と称して別に一品を設けて、授学無学人記品としたのである。

十、法師品大意

この品からの五品は、迹門の流通分で、在世の人々のみでなく、来世の人々をも利益する説法である。

つぎの宝塔品とともに、釈尊自ら弘経の功德深重を説いて、流通を勧められているのである。特にこの品では、この経の弘通を勧導して、末法の弘経の人法と、弘経の方軌を示されている。法師とは、妙法を弘通する大師で、五種の人がよく妙法を弘通するのである。

五種とは受持、読、誦、解説、書写で、この五種をもって妙法蓮華経を弘通するのが五種法師であつて、続いて華香、瓔珞、抹香、塗香、焼香、繒蓋、幢幡、衣服、伎楽、合掌の十種供養をあわせ説かれている。

そして「末法に於いて、一人のためにも妙法蓮華経を説く者は、如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と示されている。

ついで所持の法を、法、人、処、因、果に約して歎美し、高原穿鑿の譬を説かれ、弘経の方軌に、衣、座、室の三軌を説かれている。

十一、見宝塔品大意

前品と同じく弘経の功德深重を説いて流通を勧めるうち、七宝の塔が大地から涌出して、虚空に住するのを人々が見るから、見宝塔品と題するのである。

まず、宝塔の中から大音声があつて、皆是れ真実と称歎したのに、人々は驚き、大樂説菩薩は何の因縁によつて、「塔有り、涌出し、音声を発す」の三問をすれば、すなわち釈尊から三答があつた。

続いて、十方分身を召し、三変土田のことがあつて、二仏並座し、仏は神通力をもつて人々を虚空に置き、大音声に唱募し、付嘱の時至る（当に涅槃に入るべし）、付属して在る有り、と三箇の鳳詔をなし、後の上行などが涌出する密説をなしている。

また、品末には、六難九易を示して流通を勧めているのである。

この品では、多宝塔の出現に、証前起後の深旨があるのである。証前とは、塔中から多宝如来が

だいおんじよう
大音声をもつて、「釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是れ眞実」となおこれを証したことからいい、
また起後とは、後の本門寿量を起こすための遠序である。
この品から囑累品までの十二品は、虚空で説かれたから虚空会といい、前後の靈山会と並べて二
処三会というのである。

十二、提婆達多品大意

この品は、前の二品が功德の深重を挙げて流通を勧めたのに対して、往昔の提婆の弘経と、釈尊
の成道の彼我兼ね益した前例を引いて、功德の深重を証し流通を勧めるのである。

まず、前段に国王と阿私仙の往古の譚を挙げ、釈尊が「果を採り水を汲み薪を拾い食を設け」て
千歳に給仕するところの苦行の有様を説いたのである。

その阿私仙は、今の提婆達多である。この大権の聖者が、業因感果の理を示すために自ら五逆を
造り、現身に地獄に落ちたが、妙法の経力によって、天王如来の記莂をこうむるのである。

つぎに、智積菩薩の問によって文殊菩薩の海中の通経の有様を説き、これによって八歳の龍女の
成仏を説き、さらに舍利弗の疑問によって即身成仏を示すのである。

迹門の正宗分八品では声聞の作仏の得記を明かし、流通分に入つて法師品は善人成仏を明かしたのに対して、この品では悪人と女人の成仏を説き、宝塔品では釈迦多宝の二仏並座は、一切衆生の色身が本有の境智を顕わしているのです、すなわち理性の即身成仏を説いたのであるが、この品では地獄の提婆達多と、海中から出た畜生である龍女の成仏を説いたのであるから、事相の即身成仏を説かれたのである。

十三、勸持品大意

この品は前々品の宝塔品の三箇の鳳詔によつて、命に応じて、二万の菩薩は此土に、五百の阿羅漢、八千の学無学および六千の比丘尼などは他土に弘經することを誓願するのである。しかし、釈尊は、默然として八十万億那由他の菩薩を視て弘經を勧め、これらの菩薩は十方世界の弘通を發誓して、釈尊の守護を乞うたのである。

また偈文を説いて、如来滅後の三類の強敵はあるけれども、衣、座、室の弘經の三軌によつて、「我不愛身命、但惜無上道」の誓言を發したことを説いたものである。

十四、安樂行品大意

この品は法華經四要品の一で、方便品の理によつてこの安樂行を修し、後の寿量品の仏果を感ずるのであつて、普門品では化物の用をのべるのである。

前品では、深行の菩薩が弘經の甚難を歎じ、五八の声聞が娑婆を恐れて他土の弘經を誓うようなものであるから、文殊菩薩は、浅行初心の行者の濁惡世で安樂に妙法蓮華經を修行する方法を問ひ、釈尊はこれに對して身、口、意、誓願の四種の安樂行を説き、初心の人は、これに住して妙法蓮華經を弘通し修行することを示されたのである。

その相は、止（定）と觀（慧）と慈悲との三法をもつて、身、口、意、誓願の四行を導くから四安樂行というのである。

一に身安樂行とは、止に住するゆえに身の十悩亂を離れ、觀に住する故に一切法空なり、如実相、無所有性なり、依つて著せず、慈悲に住するゆえに礼拝行道など、一切の威儀ことごとく利他のためにすることである。

二に口安樂行とは、止に住するゆえ、不說過、不輕慢、不歎毀、不怨嫌であり、觀のゆえに但

説大乘であり、慈悲に住するゆえに読経し、仏を讃歎し、自然に利他するをいうのである。

三に意安樂行とは、止に住するゆえに、散乱惡想を離れ、觀に住するゆえに、如来、菩薩、十方の菩薩、一切衆生の四人に四觀あり、慈悲に住するゆえに、所修の禪定、智慧、ことごとく一切衆生のためにすることである。

四に誓願安樂行とは、止に住するゆえに、怨親平等であり、觀に住するゆえに、所対の衆生に無著である。慈悲に住するゆえに一切衆生において、拔苦与樂の誓願を發することである。

法師品の衣、座、室の三軌と、この品の四安樂行とは、たがいに弘經の方軌の表裏をなすのである。なお、四安樂行を説いた後に、譬中明珠の喩を説き、經の妙を歎じて、「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經中に於いて最も其の上に在り」と説かれているのである。

十五、從地涌出品大意

この品から經末までの十四品が本門で、開近顯遠をもつて大意としている。

本門のなかにも、また序、正、流通の三段があり、この品の初めから、「汝等自ら當に是れに因つて聞くことを得べし」までは本門の序分であつて、つぎの「爾の時、釈迦牟尼仏、弥勒菩薩に告

「げたまわく」からの半品と、寿量品および分別功德品の十九行の偈の終わり「一切の善根を具して以って無上の心を助く」までは正宗分で、つぎの現在の四信の「爾の時、仏、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく」から經末までが流通分となっているのである。

この品の前半では、他方來の迹化の八恒河沙の大菩薩が、此土娑婆世界の弘經を請うたけれども、釈尊は許さないで、迹門の大地を破つて、上行などの四菩薩を上首とした本眷属六万恒河沙の菩薩衆を召して涌出するのである。

下方涌出の菩薩は三十二相を具し、しかも数多であるのに、此土の菩薩は疑念を發し、弥勒菩薩が請を結び、なお他土の無量の菩薩も疑念を生じ、十方分身の諸仏がおさえて、本門の涌出序、疑念序を終わる。後半は、前の大衆の疑念を代表して弥勒が結請したので、いよいよ釈尊の遠寿を願わそうとした正宗分の小序ともいふべき誠許の一段がある。

そして、略開近顯遠を説き、動執生疑するのである。そのなかで、弥勒菩薩は、「父少く子老ゆ」の喩を説き、「願わくは今、解説を為せ」と騰疑致請して、ついに寿量品が説かれることとなるのである。

十六、如来寿量品大意

如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である。別して本地三仏の別号である。

寿量とは、十方三世二仏三仏の諸仏の功德を詮量するので、寿量品という。

今は正しく本地の三仏の功德を詮量するのである。

この品の一章こそ、釈尊出世の本懐、一切衆生成仏得道の真実義である。

日蓮大聖人云わく、「一切経の中に此の寿量品ましまさずば天に日月無く国に大王なく山海に玉

なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経いたづらごととなるべし」(寿量

品得意抄一二二ページ)と、この品の重要なことを説かれている。

前品で、弥勒菩薩が大衆を代表して疑念を釈尊に問うたので、まずこの品の初めに釈尊は「汝等

当に如来の誠諦の語を信解すべし」と三誠せられたが、弥勒は大衆の上首となつて、「我等当に仏の

語を信受したてまつる」と三請して止まなかつたので、釈尊はさらに重誡して「如来秘密神通之力」

を説いて、広く開近顕遠し、断疑生信するのである。

文は、法説と譬説と偈頌の三段に分けられるのであるが、

法説では、三世常住の益物が中心となり、正しく本地を開顯して、「我実に成仏してより已来、

無量無辺百千万億那由佉劫なり」と説かれ、

譬説では、良医の喩を説かれ「掃蕪和合」の良薬を服せしめて、不失心者は病尽く除かれ愈え

しめたが、失本心の者には、是好良薬を今留在此して、遣使還告して、未来の益を説かれているの

である。

偈頌は、長行を重頌している自我偈のことである。

しからば、文底仏法の立場から如来寿量品を読めば、どうなるか。

日蓮大聖人、御義口伝（御書七五二ページ）に云わく、

「如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの

意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の

法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」と。

同じく御義口伝（御書七五三ページ）に云わく、

「然りと雖も而も当品（如来寿量品）は末法の要法に非ざるか、其の故は此の品は在世の脱益なり

題目だいもくの五字計りじばか当今とうこんの下種げしゆなり、然しかれば在ざい世せは脱だつ益ちやく滅めつ後ごは下種げしゆなり仍ようて下種げしゆを以もつて末法まつぽうの詮せんと為なす云云うんぬん」と。

十七、分別功德品大意

この品ほんは、略りやく広くわうに開かい近こん顯けん遠のんして、菩ぼ薩さつ大衆だいしゆは種しゆ々じゆの功く徳どくを得えたのであるが、その功く徳どくの淺せん深じん不ふ同どうを分別ふんべつすることを説といたので、分別ふんべつ功く徳どく品ほんというのである。

この品ほんは二だん段わに分わかれていて、初はじめから弥み勒ろくが領解りようげを申のべた偈頌げしやうの終おわりまでは、本門ほんもんの正しやう宗しゆ分ぶんで、その中なかに授記じゆきと領解りようげとがあり、まそず総そうじて菩ぼ薩さつに法身ほつしんの記きを授さすけ、大衆だいしゆの供養くようがあり、ついで、領解りようげ、分別ふんべつ供養きやうがある。

つぎに、後半こうはん、「爾その時とき、仏ほとけ、弥み勒ろく菩ぼ薩さつ摩訶薩まかさつに告つげたまわく」から終おわりまでは流る通つう分ぶんに属ぞくし、つぎの品ほんの終おわりまでは初品しよほんの因いんの功く徳どくを明あかすのであつて、まねんず一いっ念ねん信解しんげ、略解りやくげ言趣ごんしゆ、広こう為い他説たせつ、深信じんしん觀成かんじやうの現げん在ざいの四信しんと、随喜ずいき品ほん、読誦どくじゆほん品ほん、解げ説せつ品ほん、兼行けんぎやう六度品どほん、正行しやうぎやう六度品どほんの滅後めつごの五品ごほんを説とき、次品じほんの終おわりまでも及およんでいる。

日蓮大聖人にちれんだいしやうにんは、南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの正行しやうぎやうを、初信しよしんの位くらいにとつておられる。

十八、随喜功德品大意

前品の流通分からこの品の終わりまでは、初品の因の功德を明かしている。前品は、初めから、「当に知るべし、是れを深信解の相と為づく」までは、現在の四信の行相と功德を明かし、それから終わりまでは、滅後の五品の行相と後分の四品の功德を明かしており、この品は初めから終わりまで初品の随喜品の因の功德を説いているのである。

随喜とは、事理に随順し、己れを慶び、人を慶ぶなりとして、釈尊の本地深遠の理性の常住を聞いて信順するのを理に順うといい、仏の三世益物の一切処に徧きを聞いて信順することを事に順うという。己れを慶ぶとは、諸法実相の理（迹門）および久遠本地の事（本門）を聞いて信解するので歡喜を生じ、人を慶ぶとは、仏も衆生も無作三身を具したりと觀ずるをもつて、一切衆生に正道を悟らせようとする大悲心を発すことをいう。

この品では、五十展転して相教えることを説き、その第五十番目の人の随喜をもつて格量の本とするのである。

十九、法師功德品大意

流通分のなかの弘經の功德が深いことを明かしたなかで、初随喜品の因の功德を明かして流通を勧めることは、前品で説かれたから、この品では、初随喜品の果の功德を明かして流通を勧めるのである。

すなわち五種法師（受持、読、誦、解説、書写）が、各々六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）清淨の功德を明かしたので、これは五品のなかの初品の随喜品（天台の觀行即）の人が、十信位（相似即）に上って得られるところであるから、初品の果の功德を説くというのである。

この品は、総じては、六根の功德を明かし、八百、千二百と各々功德の数の異なりはあるけれども、結局は、六根の功德は、互いに円融して功德の差別はないのである。また、別しては、各々清淨を得ることを説いている。

二十、常不輕菩薩品大意

流通分のなかで弘經の功德が深いことを明かしたなかの第三段、法華經を信ずる者と毀る者との

罪福を引いて証とし、流通を勧めるのである。

この品を常不輕菩薩品と称するのは、往古の常不輕菩薩の因縁を引いて説いているからである。不輕とは、身に不輕の行を立て、口に不輕の教を演べるから、不輕というのである。

この品は釈尊の本生譚に事よせて、威音王仏の滅後像法のなかに法華經を受持した常不輕菩薩は六根清淨を得たものであることを説いて、今日の釈迦仏の滅後の受持の修行を勧めたのである。前品では六根清淨の果の功德を明かしたが、この品では六根清淨の因の修行を説いた。すなわち六根清淨を得ようと思ふならば、忍難して一心に弘經すべきであることを教えたのである。また、不輕輕毀の四衆は、千劫に阿鼻地獄で大苦悩を受くと説かれて、法華經の信毀罪福の果報を明らかに説かれているのである。

なお「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏」（我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず。所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし）の文は、不輕の二十四字として有名である。

二十一、如来神力品大意

分別功德品の半品と随喜功德品、法師功德品、不輕品の三品半は功德流通を明かし、つぎの八品は付嘱流通を説くのである。付嘱流通とは、釈尊の付嘱によって經典の流通を勧めることである。

この品は、地涌の菩薩が、釈尊の勅命を受けて、弘經することを説いたのである。

神力品と名づける所以は、深法を付嘱するために十種の神力を現ずるからである。

そして、結要勸持して、称歎付嘱、結要付嘱、勸奨付嘱、釈付嘱とし、結要付嘱に、「要を以つ

て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の

一切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顯説す」とあり、これを天台大師は五重玄の依文とし、日

蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。

二十二、嘱累品大意

この品は、一切の菩薩に如来の摩頂付嘱することを明かすのである。

嘱累とは、諸菩薩を累わして、弘經を嘱託するの意である。

諸菩薩は付嘱を受けて「世尊の勅の如く、当に具さに奉行すべし」と三誓して付嘱のことが畢

つて、諸の分身仏を各々本土に還らせて、多宝仏の塔を閉じて故のようにしたのである。

二十三、藥王菩薩本事品大意

この品ほんからの五品ほんは、付嘱ふぞく流通つうの中の化他けた流通つうである。

この品ほんは弘法くわうぼうの師しを勸つとむるのであつて、宿王しゆくおう華菩薩けぼさつの問とに對たいし、釈尊しやくそんは日月淨明にちがつじようみやうとく徳如来とくによらいの事本じほんと、その仏ほとけから付嘱ふぞくを受けた藥王菩薩やくおうぼさつの本事ほんじを説といたのであるから、藥王菩薩やくおうぼさつほんじ本事品ほんじといふのである。

文中もんちゆうに藥王菩薩やくおうぼさつが苦行くぎやうして色身しきしん三昧まいを得え、報恩ほうおんに焼身しょうしん供養くやうしたことを説といてある。ここで諸仏しよぶつの同讚どうさんがあり、「善よい哉かな、善よい哉かな、善男子ぜんなんし、是これ真しんの精進しょうじんなり、是これを真しんの法ほうをもつて如来にょらいを供養くやうす」と名なづく」と説とかれた。

後段こうだんでは藥王品やくおうほん十喻じゆの譬たとを説とかれ、さらに、有名ゆうめいな「我わが滅度めつどの後のちのちの五百歳さいの中うち、閻浮提えんぶだいに広こう宣流布せんるふす」の文もんがある。

二十四、妙音菩薩品大意

この品ほんと次つぎの普門品ふもんほんとは、化他けた流通つうちゆう中の受法じゆほうの弟子でしを勸つとむるために説といたものである。

妙音菩薩の名は、この菩薩が浄光莊嚴国、浄華宿王智如来のもとから、この娑婆世界に來至する時「経る所の諸国六種に震動して、皆悉く七宝の蓮華を雨らし、百千の天樂鼓せざるに自ら鳴る」とあり、それはこの菩薩が過去に十萬種の伎樂を仏に供養し、八萬四千の宝鉢を奉った因縁によって、今は浄華宿王智仏の国に生まれて種々の神力があるからである。この品は、妙音菩薩の三十四身普門示現のことを説いたので、この品名があるのである。

この品では、妙音菩薩は、身を六道に分けて一乗を弘宣するので、身に定形がない。これは滅後に衆生の仏道を修するところの一切の人法に對して輕賤の想いを生ずべからずと、受法の弟子を誡め、さらに法華經を行ずる者は、普現色身三昧を成ずることができると、教えられているのである。

二十五、觀世音菩薩普門品大意

この品は、昔から法華四要品のひととされていて、壽量品の仏が、不思議の化用を垂れて衆生を濟度することを説いている。

すなわち觀世音菩薩が、三十三身の普門示現の妙用を垂れて、衆生濟度をすることを説くので、

化他流通中の前品妙音品と共に、受法の弟子を誡めるために説いたのである。

観世音菩薩は、この土に因縁が厚いとされているので、法華經中ではこの一品を特に別行して、
観音經と称せられて、古来から多くの人によって読誦せられたのである。

しかるに、日蓮大聖人は、御義口伝(御書七七六ページ)に云わく、

「今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥せり、乃至
観音既に法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は観世音の利益より勝れたり云云」と。

この品名については、観世音とは人であり、普門は法であり、これについて前後二番の問答をも
つて説いているからである。

それには、観世音とは化他についての名であるとし、衆生の三業の善を生ぜしめるために、一に
観世音、二に觀世意、三に觀世身と説いて、口業に他の二業を授けて、観世音と稱したのである。

また普門とは、現身說法の妙用をさして普門というのである。

この品では、三十三身十九說法を説いて供養を勧めたのに対して、無尽意菩薩は頸に繫げた宝珠
の瓔珞を与えたが、観世音菩薩は受けようとしなかったけれども、釈尊の勧めによって、これを受
け、この瓔珞を二分して、釈尊と多宝仏塔に奉ったことが説かれている。このことは、観世音は菩

薩さつであるから、無上むじやう世尊せそんであるところの二仏ふつに廻施かいせして、施者せしやの福ふくをますます大だいならしめることになるのである。

二十六、陀羅尼品大意

この品ほんは、化他けた流通るつうちゆう中、惡世あくせの弘經くきやうしや者しやに對たいして、神呪しんじゆを說といて守護しゆごし、弘通くつうさせることを說といたのである。

陀羅尼だらにとは梵語ほんごで總持そうじと翻譯ほんやくする。總そうは總攝そうせつの義ぎ、持じは任持にんじの義ぎで、一字じの中なかに無量むりやうの義ぎを總攝そうせつし、一義ぎの中なかに一切いつさいの義ぎを任持にんじするの意いである。陀羅尼だらには能よく惡あくを遮しやし、能よく善ぜんを持じするのである。

呪じゆをもつて護まもるのに五段だんがあり、藥王菩薩やくおうぼさつ、勇施菩薩ゆぜほさつ、毘沙門天王びしゃもんてんのう、持国天王じこくてんのう、十羅刹女ちうせつにょの五番ばんの神呪しんじゆである。

二十七、妙莊嚴王本事品大意

前品ぜんほんが呪じゆ(法)をもつて末世まつせ弘經くきやうの師しを護まもるのに對たいして、この品ほんは化他けた流通るつうちゆう中ちゆうの人にんをもつて去ほうを

護るを説き明かしたものである。

人とは淨徳夫人と淨蔵、淨眼の二子を指す。この三人相倚つて外道邪見の父・妙莊嚴王を正法に転入帰正させることを説いたので、これは人をもつて法を護ることを示したものである。

品末では、淨蔵淨眼の二子を「今の藥王菩薩、藥上菩薩、これなり」と明かしているのであるから、藥王、藥上菩薩の本事品とも見られるのである。

二十八、普賢菩薩勸発品大意

この品は、神力品以下の付嘱流通中の自行流通を勧めるのである。

普賢菩薩が、東方宝威徳上王仏の国にいて、この娑婆世界で、釈尊が法華經を説くのを聞いて来至し、釈尊に仏の滅後にこの法華經を如何にして持つべきであるかと問うたのに対して、釈尊は、一に諸仏に護念せられ、二に諸の徳本を植え、三に正定聚に入り、四に一切衆生を救う心を起すべしとの四法成就を説いて、法華經を再演したことを表わしているのである。

そこで、普賢菩薩は誓願を立てて、後五百歳の濁惡世に法華經を受持する行者を守護し、惡魔、魔民、鳩槃荼などの怖れを防ぎ、しかも若しは行き、若しは立ってこの經を讀誦すれば、自ら六牙

の白象王に乗って、その人を供養して守護し、または示教利喜し、なおまた、陀羅尼呪を説いて、持経者を守護することを誓い、法を守ることを誓い、すなわち人法守護を誓っているのである。

この普賢菩薩の方からいえば、この品は化他の流通となるのであるが、法華三昧を修行する行者についていうなら、自行流通となるのである。

このようにして、法華經の説法が全く畢ったので、菩薩、声聞、天、龍、人非人などの一切の一切の大衆は歡喜して、仏語を受持して去ったのである。

二十九、無量義經大意

無量義經は中国南北朝時代の齊、この齊は周末戦国時代の齊と区別するためにその国王の姓の蕭を取って蕭齊という、その蕭齊の時代に広州の朝廷寺におった中天竺の人、曇摩伽陀耶舎によって翻譯されたのであって羅什三蔵より約百年の後の翻譯といわれている。

この經の説処は、その經文に、「一時、仏、王舎城耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆万二千と俱なりき」とあるから、法華經と同じく靈鷲山において説かれたことは明らかである。

この經の説時は、法華經の序品に、「諸の菩薩の為に大乘經の無量義、教菩薩法、仏所護念と

名づくるを説きたもう。仏、此の經を説き已って結跏趺坐し無量義処三昧に入つて、身心動じたまわらず」とあり、この三昧より安詳として起ちて、方便品を説かれたのであつて、無量義經說法品に「仏の言わく、善男子、是の一の法門をば名づけて無量義と為す」とあるから、この無量義經は法華經の直前に説かれたことがわかる。

なお說法品に、「無量義とは一法より生ず」と説かれ、この一法より無量の義を生ずるのであるが、この一法とは何かといふことは、明確には説かれていない。この一法こそ、つぎの法華經において説かれる妙法蓮華經である。そこで、この無量義經は、法華經の序分であるといふことがいえるのである。

日蓮大聖人、御義口伝（御書七八五ページ）に云わく、

「法華經八卷は処なり、無量義經は無量義なり、無量義は三諦・三觀・三身・三乘・三業なり、法華經に於一仏乘・分別説三と説いて法華の為の序分と成るなり」

また云わく、

「法華の為の序分開經なり」（御書七八五ページ）と明かされている。

このように、無量義經は法華經の序分で、開經として大切な經であり、徳行品、說法品、十功

徳品の一卷三品の経である。

徳行品第一

この経は、徳行品、説法品、十功德品の三品に分けられておるが、通じて序分、正宗分、流通分の三分品といふことができる。

この徳行品は、つまり、この経の序分である。この経を説く釈迦牟尼仏は、如何に立派な仏であるかを讃えておるので、その讃える人は普通の人々でなく、菩薩や大比丘で、その菩薩は眞実の菩薩で、戒、定、慧、解脱、解脱知見等の立派な徳が具わり、しかも、不思議の徳によつて立派な働きをなす大菩薩であり、大比丘は眞実にあらゆる迷いや苦しみを離れた人々である。それらの大菩薩は文殊師利菩薩等、大比丘は舍利弗等と名を挙げて、それらの人々が集つて大莊嚴菩薩が、代表して、偈文をもつて釈迦牟尼仏を讃歎しているのである。

かかる立派な菩薩や大比丘が讃歎する仏は、如何に立派であるかを示し、それによつて、その仏の説法が如何に立派で、有り難いかを表わしておるのである。

偈文においては、仏の法身、色身、報身、応身の四身にわたつて讃えて、最後の文に仏が一切衆生を救うために難行苦行し、精進を重ねられたのは、大慈悲の故である。それ故に、「能く諸の勤

め難きを勤めたまえるに帰依したてまつる」と帰依を表わしておる。

説法品第二

この品は、この經の正説で、大莊嚴菩薩および八万の菩薩が仏を讚歎する偈文を述べおわってから、釈尊は、自分は久しからず涅槃に入る、若し疑問があるなら問うべしと申した所、大莊嚴菩薩および八万の菩薩は、「疾かに無上正覺を成ずるには何等の法門を修行すべきか」を問うた所、

釈尊は、「一法門有り」と答え、

菩薩たちは、「この法門とは何か。その意義は何か。そして、それを、どう、修行すべきか」と三点をあげて質問した。

釈尊は、この質問に答えて、この説法品があるのである。

初めに、「この一の法門を名づけて無量義と為す」と説き、「無量義とは一法より生ず。その一法とは即ち無相なり」と説き明かしておるが、結局は一法は実相であって、「仏眼を以って一切諸法を觀するに、宣説すべからず。所以は何かん。諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説きき。種々に法を説くこと方便力を以ってす。四十余年には未だ眞實を顯わさ

ず」と有名な句を説かれており、実相の一法は、この経でも遂に明らかに説かず、法華經へ入つて初めて説かれたのである。

この品には、「方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を説いて、菩薩の歷劫修行を宣説す」とも説かれて、爾前の諸大乘經は歷劫修行しなければならぬことを示されてあることも、注意しなければならぬ。

十功德品第三

この品は、この無量義經を修行して如何なる利益があるかを説いたので、所謂この經の流通分に当たるのである。

大莊嚴菩薩が、「此の微妙甚深無上大乘無量義經を説きたもう。眞実甚深」であるから、若し人が、この經を聞けば大利益があり、そして修行すれば疾く無上正覺を成ずることができる。このように、この經は不思議であるから、もっと広く人々のために甚深不思議の事を演べたまえと申したので、釈尊は、在世にもあれ、滅後にもあれ、この經を受持、讀、誦、解説、書写、如説修行すれば、十不思議功德があると、第一より第十までの不可思議の功德があることを説いたのである。

かくのごとく、無量義經は、法華經の開經序分であることは明白であつて、五重三段の第二第三重に、無量義經を序分におかれているが、御義口伝(御書七九四ページ)に、「妙法の序分無量義經なれば十界悉く妙法蓮華經の序分なり」とあつて、第五重、文底三段から見るとは、無量義經のみならず一切諸經悉く妙法蓮華經の序分である。

三十、觀普賢菩薩行法經大意

觀普賢菩薩行法經は、中国南北朝時代の初期における宋の國、この宋は得の宋と區別するために、その國王が劉の姓であつたのでその名を取つて劉宋という、その劉宋の時代に、罽賓國(加薩彌羅國—現今のインド Kashmir 地方)の人、曇無密多によつて、漢文に翻譯されたのであつて、今より約千五百年以前であるといわれる。

この經の説處は、その經文に、「一時、仏、毗舍離國、大林精舍、重閣講堂に在して、諸の比丘に告げたまわく」とあるによつて、毗舍離國(中印度十六大國の一つで摩伽陀國の北方といわれる)の大林精舍での説法と知ることができる。

また、この經の説時は、同じく經文中に、

「広く説くこと妙法華經の如し」とも、

「大乘方等經を誦習するを以つての故に、即ち夢の中に於いて、釈迦牟尼仏、諸の大衆と耆闍崛

山に在して、法華經を説き一実の義を演べたもうを見ん」と、また、

「耆闍崛山を見るに、……此の光の至る処の十方分身の釈迦牟尼仏、一時に雲のごとく集り、広く

妙法を説きたもうこと妙法華經の如し」

等と説かれているのを見ると、この經は、法華經を説かれた後であることが知れる。

なお、「却つて後三月あつて、我当に般涅槃すべし」と説かれてあるので、釈尊入滅の三月前

の説法であると考えられる。

これらを総合するに、釈尊が靈鷲山で法華經を説かれてより其処を發たれ、拘尸那城跋提河に

到る途中、毗舍離国、大林精舎で説かれた經であるということになるのである。

本經は一卷で、品を分つてはいない。一經は通じて法華經の流通分で、

御義口伝(御書七八五ページ)に、

「依正の二法悉く法華經なりと結し納めたる經なれば、此の普賢經を結經とは云うなり」

とあるごとく、法華經の結經とされるのである。

一經中きやうちゆうには、序じよ、正しやう、流通りつうの三段さんに分わかれている。

序分じよぶん

まず尊者阿難そんじやあなん、長老摩訶迦葉ちやうろうまかかしやう、弥勒菩薩摩訶薩みろくぼさつまかさうの三大士だいしは、「却さつて後三月のちみつぎあつて我当われまさに涅槃ねはんに入るべし」と聞きいたので、驚おどろいて、釈尊しやくそんに向むかつて仏の入滅はとけにゆうめつの後に、「煩惱ぼんのうを断だんぜず、五欲よくを離はなれず」して、一乘真実じやうしんじつの境界きやうがいに達たつするには、如何いかに修行しゆぎやうすべきかを問とうのである。

正宗分しやうしゆうぶん

釈尊しやくそんは、これに答こたえて、大乘經だいじやうきやうてん典てんすなわち法華經ほけきやうしゆを誦じゆし、法華經ほけきやうしゆを修しゆし、法華經ほけきやうしゆの意いを發はつする者は、今いまから自じ分の説とく所ところを修しゆせよとて、六根こんを清淨しやうじやうにして法華經ほけきやうしゆを誦じゆせば、六牙げの白象びやくせうに乗のる普賢菩薩ふげんぼさつを觀かんずるを説とき、(六牙げとは六根清淨ろくこんしやうじやうをあらわし、白象びやくせうとは正ただしき道理どうりを見詰みつめて静せいなるをあらわし、普賢菩薩ふげんぼさつは理りをあらわすのであつて、これらのことは静寂せいじやくなる正ただしき道理どうりを意味いみするのである。つまり法華經ほけきやうしゆで説とく諸法実相しよほうじつさうをいうのである)普賢菩薩ふげんぼさつを觀かんずるによりて、一層深そうふかく懺悔ざんげして釈迦牟尼しやくかむに仏ぶつ、多た宝仏塔ほうぶつとう、十方分身じやうふんじんの諸仏しよぶつを見みること、すなわち自ら仏身みずかぶつしんを成じやうずることを説とかれてゐるのである。

懺悔ざんげとは、普通ふつうに考かんがへるところの改悛かいしゆんの情じやうを現あらわすことだけではないのであつて、仏法ぶつぽうでいう懺悔ざんげとは、仏の常住ほとけじやうじゆうを信しんじ、自己じこの向上發展かうじやうはつてんを計はかり、成仏じやうぶつの境界きやうがいに達たつせんと努力どりよくすることである。

その方法は、法華經を専心に読誦することであると説かれている。

また、この經文中に、日蓮大聖人がしばしば御引用になられる「仏の三種の身は方等より生ず、是れ大法印にして涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず」の文もある。

流通分

そこで、釈尊は、阿難に、「大乘經を誦し、第一義甚深の空法を思わば、一彈指の頃に百万億阿僧祇劫の生死の罪を除却せん」と示され、懺悔のため受戒を説き、末法の自誓自戒を示され、最後に第一より第五にいたる五段の懺悔の法を教えて、滅後の四衆が、かくのごとき懺悔の法を修習すれば、「久しからずして当に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし」と説かれて、經文を終わっている。